

同志社大学  
2021 年度 卒業論文

論題：ギャンブル依存の父をもつ子どもの依存症問題からの克服  
——大学生 A のログを用いたコレスポネンス分析から——

社会学部社会学科  
学籍番号：1109181066  
氏名：白髭 未歩  
指導教員：立木 茂雄

## 目次

### 1 はじめに

- 1.1 ギャンブル依存症の現状
- 1.2 ギャンブル依存症者の家族
- 1.3 実体験と問い

### 2 理論枠組み

- 2.1 ミードの社会的自我論
- 2.2 浅野の自己への物語論的アプローチ
  - (1) 物語論的アプローチの概要
  - (2) 自己は物語ることを通して生みだされる
  - (3) 「語り得ないもの」
- 2.3 ジンメル为社会分化論 社会圈の交差
- 2.4 ボーエンの家族システム論

### 3 研究方法

- 3.1 調査対象者
- 3.2 実施時期
- 3.3 調査内容とデータの情報収集方法
- 3.4 分析手法

### 4 結果と考察

- 4.1 コレスポネンス分析
- 4.2 第一のフェーズ (2006年～2011年)
- 4.3 第二のフェーズ (2012年～2019年)
  - (1) 現在のAにとっての「恥ずかしい」エピソード
  - (2) 家庭からの自立による「I」の自由化——「社会分化論」——
- 4.4 第三のフェーズ (2020年～2021年)

### 5 結論

# 1 はじめに

## 1.1 ギャンブル依存症の現状

ギャンブル等依存症とは、ギャンブル等依存症対策基本法第2条より、「ギャンブル等（法律の定めるところにより行われる公営競技，ぱちんこ屋に係る遊技その他の射幸行為をいう。第七条において同じ。）にのめり込むことにより日常生活又は社会生活に支障が生じている状態」（総務省 2021）と定義されている。

厚生労働省によると、ギャンブル等依存が疑われる者の推計値（過去1年間）は約70万人である。一方、同じく身近な依存症であるアルコール依存症の推計値（時点経験）は約57万人であり、ギャンブル等依存症に悩む者は非常に多い。にもかかわらず、ギャンブル等依存症の患者数は外来2,929人、入院261人（2016年）であり、総患者数は約3,200人である。つまり、治療をしようと病院を訪れる割合は、わずか0.46%程度なのである。アルコール依存症の患者数は、外来95,579人、入院25,606人（2016年）、総患者数約12万人であり、病院を訪れる割合は約21%である（厚生労働省 2021）。以上から、ギャンブル等依存が疑われる者が病院を訪れる割合は、相対的に見ても非常に少ないことが分かる。これは、ギャンブル等依存の病気としての認知度が非常に低いことを示す。ギャンブル等依存症は、アルコール依存などの物質依存ではなく、行動嗜癖に分類されるため、目に見えにくく、直接的な健康被害もないため、本人や家族が病気だと認識しないのであろう。よって、ギャンブル等依存の当事者やその家族の多くは、ギャンブル問題が発生してもどうすればいいか分からず、社会から孤立した状態で苦しんでいるのが現状であるといえる。

## 1.2 ギャンブル依存症者の家族

ギャンブル依存症者の家族について西川京子は次のように述べている。

ギャンブル依存は否認と嘘がつきものです。家族は不安と不信を抱えて何年間にもわたりギャンブルと借金で悩み、苦しみます。（中略）配偶者や両親はギャンブル問題のストレスでパニック障害やうつ病を発症しています。このような機能不全の家庭で育つ子どもたちは、情緒的障害、不登校、引きこもりなどの問題を抱えることがあります。（西川 2014: 25）

ギャンブル依存問題を抱える家族は大きなストレスにさらされている。ギャンブル等依存症は当事者だけの問題ではなく、その家族も大きなストレスを抱え苦しみ、苦難の生活を送っている。ギャンブル依存症は家族の病なのである。したがって、ギャンブル依存問題の克服には当事者だけでなく、家族に対するアプローチも必要になる。

さらに西川は、家族が依存症問題から立ち直るために必要な取り組みのひとつとして自己の確立と自立をあげ、次のように述べている。

家族は、長年の依存症問題をかかえた苦難の生活のなかで、自分の考えや感情や行動に関心を向けるゆとりさえももてず、自分自身を見失っていました。自分自身に関心を

向けて、自分の考え、感情、都合などに気づき、それを受け入れ、表現することから始まります。(西川 2018: 70)

このように、家族は依存症問題に囚われ自分自身のことを考える余裕がなくなってしまふ。そして共依存状態に陥ってしまい、自分自身を見失ってしまうのだ。そのため、家族にも依存症問題から立ち直るプロセスは必要であり、その中の 1 つの手段として、自己の確立と自立があげられている。自分を見失ってしまっている家族は、時間をかけて自分自身と向き合い、自己の確立と自立を達成することで、依存症問題から克服することが可能になるのである。

### 1.3 実体験と問い

本論文を書くきっかけは、筆者の友人である大学生 A である。A の父親はギャンブル依存症だという。A が小学 2 年生の時に、父親から直接知らされたそうだ。最近になって、ようやく父のギャンブル依存が落ち着き、家族が仲良くなったと嬉しそうに話していた。しかし、当時の A は、ギャンブルのために多額の借金を繰り返す父親が憎く、暴言を何度も吐いたという。ギャンブルにのめり込む父親のことを理解することが出来ず、それを病気だと認めようとはしなかった。借金のトラブルが原因で、家庭内でも辛い出来事が多くあったそうだ。思い出だけでも胸が痛くなるという。当時は誰にも話すことが出来ず、辛い想いは自分の中に隠したままにしていたという。そして、小学生の時から約 10 年間、父親のギャンブル依存症に苦しんだが、現在は長年の苦悩から解放され、家族の依存症問題から立ち直って、平穏で幸せな日々を過ごしているという。このことを上で述べた西川 (2018) を参考にして考えてみると、過去の苦悩に満ちた A から、現在の幸せな大学生 A になる前に、家族の共依存状態から脱却し、どこかで自己の確立と自立を達成しているということになる。本論文では、大学生 A に思い出して書いてもらった小学生時代から現在に渡るログを基に、「A はどのようにして家族の依存症問題から克服したのか」を明らかにしていく。

本稿の構成として、第 1 章では本研究で重要な理論となる 4 つの理論について説明を行う。第 2 章では研究方法について述べる。そして第 3 章では A に書いてもらったログとそのコレスポネンス分析の結果を基に考察する。そして、第 4 章にまとめと今後の課題を記す。

## 2 理論枠組み

### 2.1 ミードの社会的自我論

これまで、社会学では「自我」という現象は他者との相互行為から生まれるものと考えられてきた。代表的な議論が G.H. ミードの議論だ。自己はそれ単体で成り立つものではなく、他者との相互行為の中で誕生するものであるという考えである。ミードは、人が社会に生まれ落ちた瞬間から巻き込まれるさまざまな社会関係のことを「社会的潮流」と表現し、次のように述べている。

自我 (self) とは、まず存在していて、そのつぎに他者と関係をむすんでいくようなものではなく、それは社会的潮流の中、いわば小さい渦で、したがって社会的潮流の一部でもある。それは、個人が自分の属している状況にたいして、たえず前もって自分自身を適応させていき、状況にたいして反応し返していく過程である。(Mead 1934=1974: 195)

つまりミードは、社会的潮流、すなわち社会関係が先に存在し、その後で小さな渦として自我が生まれてくると主張している。すなわち自我は、社会関係の一部であり、小さな渦のように、自分の属している社会関係に自分自身を適応させ、社会関係に反作用していく過程だというわけである。これは、人は他者の反応を手がかりに、自分が何者であるのかを知り、そして何者であるべきなのかを知り、自分をコントロールするという考えからなされた主張である。この主張について、『「I」と「me」』という概念を用いて以下で詳しくみていく。

ミードは自我には2つの局面が存在するとして、『「I」と「me」』という概念を用いて、理論を展開し、次のように述べている。

「I」は他者の態度を採用することで生じてくる自我に対応して動く。他者の態度を採用すると「me」が登場してきて、その「me」にたいしてわれわれは「I」として感応(リアクト)する。……「I」とは、他者の態度にたいする生物体の反応であり、「me」とは、他者の態度(と生物体自身が想定しているもの)の組織化されたセットである。他者の態度が組織化された「me」を構成し、人はその「me」にたいして「I」として感応(リアクト)する。(Mead 1934=1974: 186-7)

つまり、他者の態度を自分自身の中で想定あるいは、集団や組織の態度をそのまま受け入れることによって、自分自身はこうあるべきだという「me」を構成する。そして、その「me」に対して「I」として行動するのである。また、「I」に対してミードは次のようにも述べている。

他人たちの態度を採用して自分の自我を適応させるか、それともそれと戦い抜くかという問題である。自分の自我意識を用いる過程で自我としてその個人を認識することこそが、かれに自己の権利主張という態度や、共同体への献身という態度を与える。

(Mead 1934=1974: 206)

つまり、他者の態度を採用して構築される自我「me」に対して、「I」は、必ずしも従順に反作用するものではなく、反抗的に反作用する場合もある。ここでは、従順な反作用が共同体への献身とされており、反抗的な反作用が自己の権利主張とされている。そうした「me」に対して反抗的に反作用する「I」について、ミードは「me」をある意味で、検閲官であると表現し、また社会党性は「I」の表現に対抗する「me」の表現であると述べている。さらに、ミードは「I」と「me」のバランスのとれた状態を貴重であるとし、次のように述べている。

とりわけ貴重に思えるのは、こういう種類の表現を獲得できる状況。すなわち個人が自分の独力で何かが実行でき、責任を分担でき、自分自身の方法で物事を遂行し、自分自身の頭で考えるチャンスもある、そういう状況である。個人が「me」の構造のなかにそういう自己表現のための機会を発見しているような社会状況は、いちばん興味深くて満足の多い経験をもたらす。(Mead 1934=1974: 226)

また、ミードは、「I」は社会環境にも影響を与え社会を再建させる力を持っているとし、したがって同時にそれはその社会に属している「me」の再建を意味すると述べている(Mead 1934=1974)。

## 2.2 浅野の自己への物語論的アプローチ

### (1) 物語論的アプローチの概要

浅野智彦は、臨床的な物語療法から得た学びを取り入れ、人が自分自身について語る「物語」をキー概念として自己の生成と変容を理解するアプローチ、「自己への物語論的アプローチ」を構築した。浅野は、自分の成り立ちを「物語」という概念を用いて考えた。ここで言う物語とは、自己物語、つまり人が自分自身について語る物語である。浅野は、そのような自己物語に着目して自己の生成・維持・変容を探求する「自己への物語論的アプローチ」を生み出した。「自己への物語論的アプローチ」の主張は次の2点に整理できる。第1に、自己は自分自身について物語ることを通して生み出されるということ、そして第2に、自己物語はいつでも「語りえないもの」を前提にし、かつそれを隠蔽しているということである(浅野 2001)。この2点について詳しく以下でみていく。

### (2) 自己は物語ることを通して生みだされる

まず、自己は自分自身について物語ることを通して産み出されるという第1の点について説明する。浅野によると、人は自己物語を語る時、人生のエピソードのうち必要なものだけを取り出して、それをある筋に沿って紡ぎ合わせる。そして自分がどんな人間であるのかを語る。人は自己物語を語る(心のおしゃべり)ことで、自分がどんな人間なのかを知り、どのように振舞うかを決めているということである。つまり「私」は自分自身のエピソードの選択と配列を通してはじめて現れる(浅野 2001)。

浅野は、そうした自己物語には3つの特徴があるとする。1つが視点の二重性である。自己物語を語る時、一方には語り手が聞き手に向けて語りかけている世界があり、他方にはそこで語られた登場人物が活躍する世界がある。自己物語の場合、語り手と登場人物は同じ人物であるが、結末を知っている視点(語り手の視点)と実際にその出来事を体験している物語内部の視点(登場人物)とが原理的に異なっているという点で、二重の視点だといえる(浅野 2001)。

2つ目が、出来事の時間的構造化である。自己物語は、諸々の出来事を時間軸に沿って構造化する語りであるということだ。つまり、無数にある出来事からある出来事だけが選択され、時間軸に沿って配列が行われる。これが、物語の「選択と配列」である。この「選択と配列」は、今の自分(結末)をどのようなものかと考えるかにしたがって、またその結末を納得のいくようにするように行われる。つまり、自己物語は、必ず結末から逆算された(振り

返った)形で選択・配列されるのであり、事実ありのままの記述ではあり得ない(浅野 2001)。

3つ目が他者への志向である。自己物語は本質的に他者に向けられた語りであるということだ。上で物語の構造が結末を納得の行くものにするように書いたが、この「納得の行く」という表現にはすでに他者の存在が含意されているのである。なぜなら納得の行くように語るということは、語り手の物語に対して語り手とは異なった視点からの評価を受けるということを意味しているからだ。つまり、自己物語を語る行為は一定の社会や共同体を前提にしている(浅野 2001)。

### (3) 「語り得ないもの」

次に、自己物語はいつでも「語り得ないもの」を前提にし、かつそれを隠蔽しているという第2の点について述べる。

はじめに「語り得なさ」は、「語り尽くせなさ」とは違う。つまり、「語り得なさ」は体験された現実が複雑すぎて全てを語りつくすことが出来ず、物語の外側に取り残されたものというわけではない。「語り得なさ」とは、まさに自己物語のただ中に現れるものであり、自己物語の一貫性や完結性を内側からつき崩してしまうものである。どんなに首尾一貫したように思える自己物語にも必ずこのような「語り得なさ」は存在し、これを隠蔽し見えなくすることによってはじめて、人には一貫した自己同一性が産み出される。そのため、逆をいえば、この隠蔽された「語り得ない」ものを見えるようにすることによって、一貫性や完結性を内部から揺さぶれば、自己物語を書き換え、自分を変えることが出来るということになる。では、「語り得ないもの」はどのように自己物語の中に現れるのだろうか。主に3つの現れ方があり、それが「物語の宙づり」、「沈黙」、「未決定なエピソード」である(浅野 2001)。

まず、1つ目の「物語の宙づり」についてである。自己物語は、自分が自分自身について語るため、発言そのものとその発言の真偽を支える視点とが同じ語り手に属してしまう。そのため、物語の中の自分と、現在の自分との差異が大きすぎると、自己物語の信憑性は薄くなってしまふ(浅野 2001)。

2つ目が「沈黙」である。これは、被災の経験などのトラウマ的体験にしばしばみられるこうした体験は、語られないからといって、語るに価しないというわけではない。それらの体験は当事者の人生にとってほかの何ものにもまして決定的な意味をもつものであると思われるのに、語る事ができないのである。この沈黙は、語り手と語られる体験との間に十分な距離が確保できないからであると考えられる。体験と語り手の距離が近すぎて端的にショートしてしまい、当事者の視点から距離を置いた語り手の視点を確保できないのだ(浅野 2001)。

3つ目が「未決定なエピソード」である。これは、自己物語の中に物語の筋からは逸脱するようなエピソードが出現するという場合である。例えば、語り手による「問題に満ちた」物語の中に、しばしばその問題を免れたエピソードが現れるというような場合である(浅野 2001)。

このように、自己物語は常に「語り得ないもの」をはらんでいる。上で、「語り得ないもの」を隠蔽し見えなくすることによってはじめて、人には一貫した自己同一性が産み出されると述べた。自己物語はいつでも「語り得ないもの」を前提にし、かつそれを隠蔽している。

「語り得ないもの」は、語られてはいないが、きわめて現実的である。それは、現実を強くとらえ痕跡を残す。また、トラウマ的体験にさらされた場合、本人はそのことを忘れているにもかかわらず、それが「現実」の生活に様々な支障をもたらすこともある。物語論的アプローチは、こうした物語の内部に働く隠蔽や忘却の力に注目し、問題化しようと試みるのである（浅野 2001）。

### 2.3 ジンメルの社会分化論 社会圏の交差

私たちは、家庭や学校、会社など、様々な社会に属している。G. ジンメルは「社会分化論」で、こうしたそれぞれの社会を社会圏と呼んだ（Simmel 1890=1973）。ジンメルは、社会圏の大きさと数について、「個人が必要とするすべての保護を彼に提供する集団が、小さければ小さいほど、さらに個人の生存の可能性を、まさにこの集団の外部で見いだすことが少なければ少ないほど、個人はますますその集団に融合しなければならない」と述べている（Simmel 1890=1973）。つまり、個人の所属する社会圏が小さければ小さいほど、また少なければ少ないほど、連帯意識が強くなり、その社会圏への依存が強くなるのである。また、ジンメルは、社会圏の大きさと個性の発達の関係について、次のように述べている。

個人主義の極端な育成に、より広い余地を与えるのはきわめて大きな集団である。そうとすればこのことは、より狭い集団に比較して、広い集団のほうがわれわれに要求するところもより少なく、個人に配慮するところもまたより少なく、そのためきわめて倒錯した衝動が完全に発達するのを妨げることも、またより少ないということの結果に過ぎない。だから圏の大きさは、たんに消極的な責任を負うにすぎず、したがってむしろ重要となるのは、集団の内部よりも外部での発展である。そして小さな集団よりもより大きな集団のほうが、その成員にたいして外部の発展への可能性を与えるのである。（Simmel 1890=1973: 61）

社会圏が拡大することで、先に述べたような連帯意識や依存が弱まり、個人はその社会圏に縛られなくなる。その結果、個人は集団の内部だけでなく、外部で発展することが容易になり、そうした集団からの自立が個性の発達を促すことになる。つまり、社会圏が大きく、その緊密性がゆるやかであることが、個人の外部での発展を許し、個性の発達を生むのである。また、ジンメルは、「個人の属しているさまざまな圏の数は、文化の尺度をはかる程度の一つである」とし、次のように述べている（Simmel 1890=1973）。

個人の属している諸集団は、いわばひとつの座標系を形成し、そこで新しくつけ加わるそれぞれの集団が、個人をさらにますます正確かつ一義的に規定することとなる。それぞれひとつの集団に所属するごとに、個人はさらにまた広い活動の余地を与えられる。（Simmel 1890=1973: 122）

個人は、様々な社会圏に属することによって、多種多様な社会圏の組み合わせを持つことが出来る。また、属する社会圏が多くなれば多くなるほどその組み合わせは個性的なものになり、個性はより豊かなものになるというのである。またジンメルは「ところで人格の規定



性は、規定する圏が集中しているよりもむしろ並存している場合のほうがそれだけより大きくなるであろう」とも述べている (Simmel 1890=1973)。つまり、ひとつの圏に所属していることがそれ自体としてほかの圏への参与にもなってしまうような状態、すなわちひとつの圏と他の圏に繋がりがあがるような状態よりも、ひとつの圏と他の圏が重ならないような、それぞれが独立して存在している圏に複数所属していることが、個性の豊かさには重要であるといっているのだ。また、ジンメルは次のようにも述べている。

ところで公的な精神の発達を示されるのは、何らかの客観的な形式と組織化とをそなえた圏が十分に多数存在し、それが多様な素質をもった人格のそれぞれの本質的側面を結合させて、それに協働的な活動をゆるすということにおいてである。これによって集合主義の理想と個人主義の理想への均衡均整の取れた接近が与えられる。……進歩した文化は、われわれがわれわれの全人格で所属する社会圏をますます拡大させるが、しかしそのかわりに個人をますます自立させる。(Simmel 1890=1973: 125-6)

公的な精神は、個人が異なった複数の社会圏に属し、その中で相互的作用が行われることで生まれるというのである。さらにそれにより、個人はひとつの社会圏に束縛されることなく個性を発揮でき、共同的な意識と個人的な意識はバランスの取れた状態、すなわち自立した状態になるというのである。

## 2.4 ボーエンの家族システム論

家族システム論とは、家族をひとつのシステムと考え展開される理論である。その中で基盤となる理論に M. ボーエンの三角形化の概念がある。ボーエンによると、ある二者間に不安や緊張が起こった場合に、第三者を巻き込んだ三角関係のシステムを構成し、システムの安定化を図ろうとする傾向が強くなる。特に、不安や緊張状態にある二者のうち、不満をよりつよく感じる者が、新たに巻き込んだ第三者と緊密な関係になる場合が多いとされている。こうした三角関係により、一時的に二者間の緊張や不安は緩和され、家族システムは安定するものの、この状態は、本質的に安定した関係性とはいえない。さらに、家族内において三角形化が強化されると、その結果として症状が固定化する場合があるため、家族の症状を改善するためには、脱三角形化をする必要がある。また、三者関係から一人が離脱することで、残りの二者関係は安定化する場合もあり、逆に不安定化する場合もあるという (Kerr & Bowen 1988=2001)。

## 3 研究方法

### 3.1 調査対象者

ギャンブル依存症の父を持つ大学生 A に調査を行った。A は、現在 22 歳で大学 4 年生の女性である。A は、父、母、兄、A の 4 人家族である。A は大学入学と同時に実家を出て 1 人暮らしをしている。A の兄も既に実家を出て暮らしている。

ここで、A の家族のことについて簡単に説明しておく。A は、父がギャンブル依存症であることを小学 2 年生の時に、父から直接聞いたそうだ。A の父はギャンブル依存の治療を

していたが完治は難しく、何度もギャンブルによる借金を繰り返した。ギャンブル依存が原因のトラブルは頻繁に起こり、家でも怯えながら暮らしていたようだ。現在、Aの父のギャンブル依存症は落ち着いており、家族関係も良好で幸せに暮らしているという。

### 3.2 実施時期

2021年5月～11月の7か月間にわたって、Aにログ作成をお願いした。11月～12月にかけて、次々以降で述べているような分析を行い、考察した。

### 3.3 調査内容とデータの情報収集方法

まずデータの収集のため、大学生Aに、家族とギャンブル依存症をテーマに、小学生時代から現在までのエピソードを思い出してもらい、自己物語としてエクセルファイルにログを記してもらった。記憶だけでは想起されないエピソードがあることを考慮して、過去の写真やモノを手がかりにエピソードを思い出して書いてもらったりもした。また、エピソードとともに、その日付、エピソード当時の感情と、エピソードを書いている現在の自分の感情をエクセルファイルに書いてもらった。その後、考察の部分において追加で、現在の自分の感情の詳細や、Aの小学生から大学生における文化圏について聞き取りを行った。

### 3.4 分析手法

本論での分析は、Aに書いてもらったエクセルのログデータから、「出来事が起こった年」、「その当時の感情」、そして「ログを書いている時点での感情」を用いて、コレスポンデンス分析を行った。コレスポンデンス分析とは、集計したクロス集計結果を使って、行の要素と列の要素を利用し、それらの相関関係が最大になるように数量化して、その行の要素と列の要素を散布図に表したものである。各要素の距離が近いほど、関係性が近いといえることができる。その結果、出来事が起こった年と各感情の出現回数の相関関係を表す散布図とそれに対応するエピソード番号の散布図を得ることができた。

## 4 結果と考察

### 4.1 コレスポンデンス分析

図1はコレスポンデンス分析によって得られた分析結果を散布図に表したものである。年に沿って感情の動きが感覚的にわかるようになっている。図2は、対応するエピソード番号の散布図である。なお、エピソード番号はAが思い出して記した順番になっており、時系列に沿ったものではない。

図1では、第1象限から第3象限に様々な感情が位置しているが、各象限ごとに異なる性質の感情が位置している。年の推移をみてみると、初めは第2象限に位置しているが、年を経るごとに第3象限へと移動し、その後一時的に第3象限を飛び出て第1象限へ少し向かうが再び第3象限へもどり、そして、最終的には第1象限へと移動している。では、それぞれの象限は、どのような意味を持つのだろうか。以下、ミードの理論的枠組みを通して、Aによる依存症問題との関わりの変化について考察する。2006年から2011年が該当する第2象限には、当時の感情として「母への同情」、「落胆」、「悲しい」、「憎しみ」、「諦め」、

「不信心」、「怒り」、「不安」、「悔しい」、「恐怖」、「苦しい」といった依存症問題にただ巻き込まれて引き起こされている感情が位置する。すなわち「me」が中心となっている状態である。次に2012年から2019年が該当する第3象限にある感情は、「葛藤」、「苦しい」、「安心」、「嫌悪」、「不安」、「恥ずかしい」、「後悔」、「中立的」であり、ここではただ巻き込まれている現れる感情ではなく、何か自分でアクションしたことによって現れる感情が多くみられる。すなわち「I」が中心となっている状態である。そして、2020年から2021年に該当する第1象限にある感情は「楽しい」「幸せ」「嬉しい」といった正の感情であり、Aが依存症問題を克服し、苦悩から逃れた状態である。

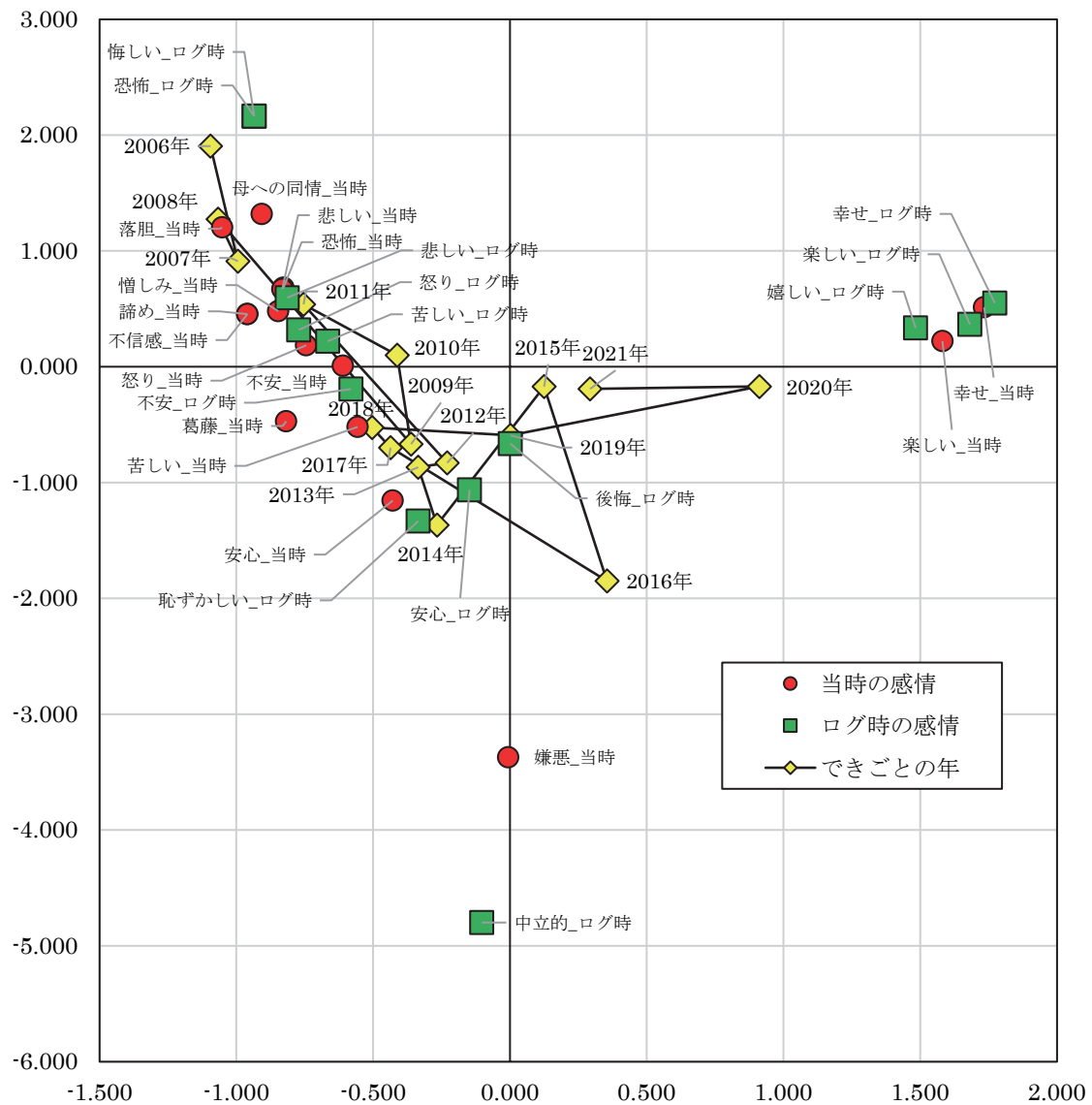


図1 Aのログを用いたコレスポンデンス分析

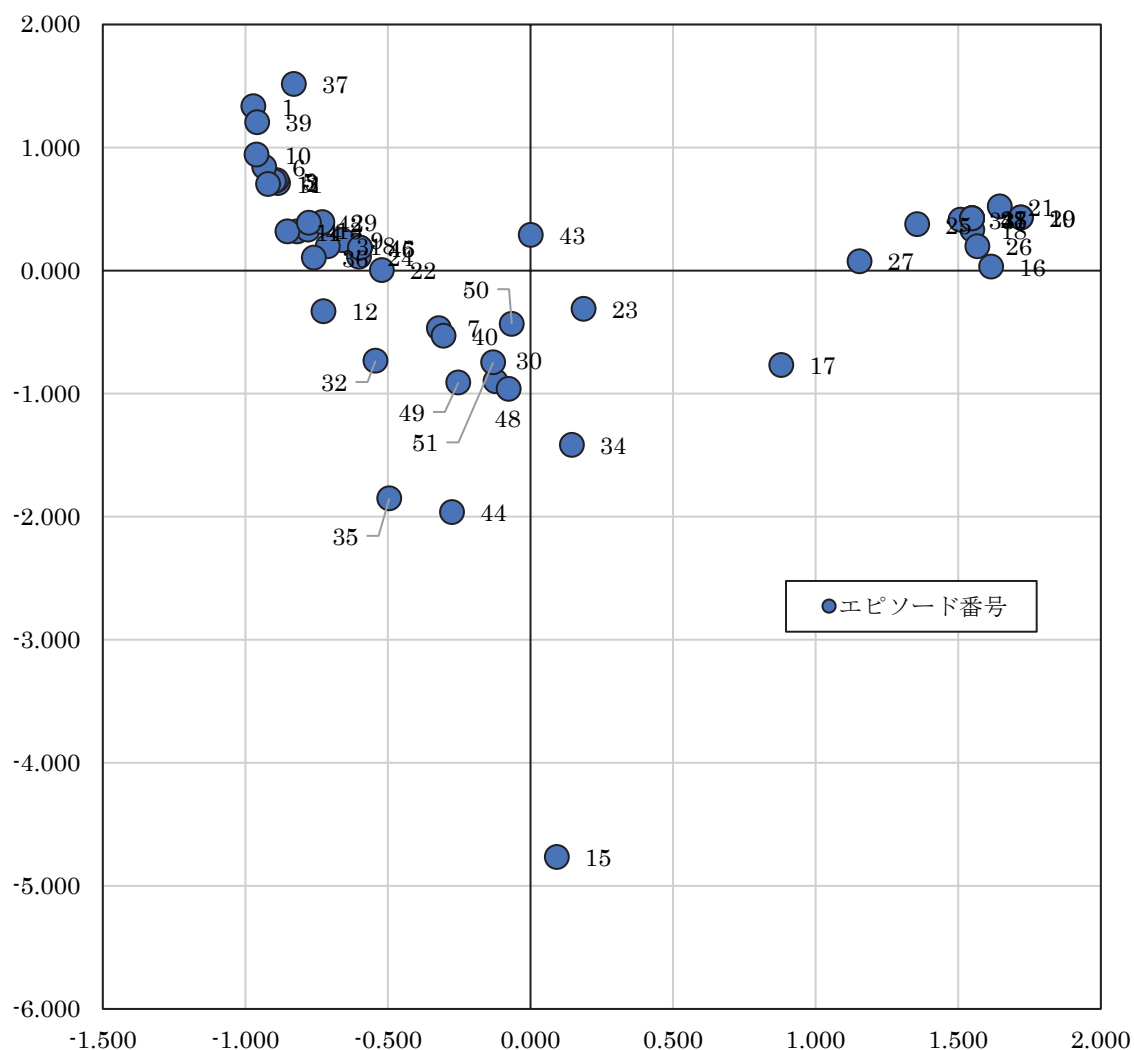


図2 対応するエピソード番号

では A は、依存症問題にただ巻き込まれている状態の第 2 象限から、自分でアクションを起こしている第 3 象限を経て、依存症問題から克服する第 1 象限へと向かうまでに、一体どのような出来事があり、A にはどのような変化があったのだろうか。以下では、第 2 象限に位置する年、すなわち 2006 年～2011 年を第一のフェーズ、第 3 象限に移動し複雑な動きを見せる年、すなわち 2012 年～2018 年を第二のフェーズ、第 1 象限に向かっていく年、つまり 2019 年～2020 年を第三のフェーズとしてそれぞれ詳しくみていく。

#### 4.2 第一のフェーズ (2006 年～2011 年)

第一のフェーズは 2006 年～2011 年であり第 2 象限にあたる段階である。第一のフェーズで現れている当時の感情は「母への同情」「落胆」「悲しい」「憎しみ」「諦め」「不信感」「怒り」「不安」といった、負の感情である。また、ログを書いた際に現れた感情は「悔し

い」「恐怖」「悲しい」「苦しい」「怒り」である。当時の感情をみると、ギャンブル依存症によるトラブルで引き起こされる負の感情が並んでいる。また、ログ時の感情には「悔しい」や「悲しい」と記されており、ここから A はギャンブル依存症による家庭のトラブルという渦に巻き込まれ、当時の A はどうすることもできず身動きがとれなかったことが伺える。よって、この時の A は、依存症問題で様々な症状を抱える家族の態度をそのまま取り入れた「me」が中心となっているフェーズであると考えられる。

#### 4.3 第二のフェーズ (2012 年～2019 年)

第二のフェーズは、2012 年～2019 年であり、第 3 象限にあたる段階である。ここで注意しておきたいのが、2015 年から 2016 年にかけて一度第 3 象限を飛び出し、第 1 象限に近づこうとしている点である。2015 年と 2016 年に起こった出来事として記されているログについては、11 個中 9 個が写真から想起されたものである。写真は大抵笑顔で楽しそうな様子が切り取られていることが多く、A はそうした写真から「楽しい」「幸せ」「嬉しい」といったエピソードを多く記している。2015 年と 2016 年が、一時的に第 1 象限へと向かっているように見えるのは、これが原因だと考えられる。

第二のフェーズで現れている当時の感情は、「葛藤」「苦しい」「安心」「嫌悪」であり、ログ時の感情は「不安」「恥ずかしい」「安心」「後悔」「中立的」である。いずれも負の感情が多いが、第 1 象限にある感情群とは違う性質であることが分かる。当時の感情をみてみると、第 1 象限にあるような、「me」として表れる感情ではなく、「安心」「葛藤」「嫌悪」というように A が安心を得たり、時には父を嫌悪したりと、「me」に対して反作用している。つまり、この第二のフェーズは、「me」に対して、A が「I」として様々な反作用をしているフェーズである。ミードによると、こうした「I」としての行為は、社会環境にも影響を与え、社会を再建させる力を持っており、したがってそれは、同時にそれはその社会に属している「me」の再構築を意味する (Mead 1934=1974)。すなわち、このフェーズで A が起こした様々な「I」としての反応は、A の家族に影響を与え「me」を再構築させ、A を克服の第三のフェーズへと移行させたと考えられる。

##### (1) 現在の A にとっての「恥ずかしい」エピソード

ログ時の感情には「恥ずかしい」や「後悔」といった感情がある。つまり現在の A が、当時の A における「I」としての行為を「me」として振り返って見たとき、当時の「I」を「恥ずかしい」と思い、またしばしば「後悔」しているのである。

A は、ログを書いている時に、ログ時の感情に「恥ずかしい」が出るエピソードは、最も語るのに勇気があるものだと言っていた。実際に、「恥ずかしい」エピソードは、ログを書き始めて約 3 か月目にしてようやくぽつりぽつりと 2 つ現れ、約 5 か月目にしてやっと芋づる式に 3 つ連続で現れた。筆者は、この「恥ずかしい」エピソードが、A にとっての語り得ないエピソードであったと考えた。そこで、A にそのエピソードが「恥ずかしい」理由について追加でログに起こしてもらおうと「今は明るい人だと思われたいのに、闇を抱えた暗い人だと思われるのではないかと不安に思う。」「父のことを知られているから余計に、精神的におかしな人だと思われるんじゃないかと不安に思う。」と記されていた。当時の「I」としてのエピソードは、第 2 象限にあるような家族の態度をそのまま採用した「me」のエピソードとは異なり、「I」として自発的に行動しているエピソードであるので、現在の自分と完

全に切り離して考えることが難しく端的にショートしてしまうエピソードであるといえる。また同時に、ギャンブル依存から克服したはずの現在の A の信憑性をゆらがせるようなエピソードであるため、A にとってそうした「恥ずかしい」エピソードは語り得ぬものとなっていたと考えられる。

しかし、これらのエピソードは、語り得ぬものだからといって現在の A にとって関係のないものではない。逆を言えば、A にとって語り得ぬ「恥ずかしい」エピソードは、現在の自分と切り離して考えることが出来ないような現在の A にとって非常に重要な「I」としてのエピソードであり、また、克服したという結果の信憑性を揺らがせるほど、A が依存症問題にただ巻き込まれている「me」に対して、A が「I」として必死に自発的な反応を起こしたエピソードであるはずなのである。よって、現在の A に「恥ずかしい」という感情が現れているエピソードの中に、克服の第三のフェーズへと向かうキーポイントがあるはずである。

とりわけ、図 1 のコレスポネンス分析を見ると、2019 年が第三のフェーズへ向かう機転の年となっていることが分かる。2019 年における家族の態度をそのまま採用して構築された「me」に対して反作用した「I」としての出来事が家族の態度を変化させ、その結果として「me」を再構築し、A を克服の第三のフェーズへ向かわせたと考えられる。つまり、第二のフェーズにおいて 2012 年～2018 年の A の「I」としての行動は、克服へ向かうような「me」の再構築には至らなかったといえる。

では、2012 年～2018 年にわたる A の「I」としての行動は、なぜ克服へ向かうような「me」の再構築には至らなかったのか。一方で、2019 年における「I」としての行動は、どのように克服へと向かうような「me」の再構築を成し遂げたのだろうか。以下では、現在の A が「恥ずかしい」と感じているエピソードを取り出し、上記の間について考察していく。「恥ずかしい」エピソードは、エピソード 32, 35, 49, 50, 51 に該当する。では、順にこれらのエピソードについて詳しくみていく。

#### (a) エピソード 32

エピソード 32 は 2014 年 6 月 3 日に起こった出来事である。そこには、「中学生の時は、友達というよりも母という方が楽しく、母とはずっと一緒にいた。そんな中、母親が正社員として夜遅くまで働き始め、A は母親の帰りがことに寂しさを感じ、寂しいことを母親に分かってほしくて、わざと母親を心配させるような行動をとった。その後、母は仕事を辞めて、A はそのことが嬉しかった」というエピソードが記されている。

当時の感情には「不安」「寂しい」「苦しい」とあり、現在の A にとって、「苦しい」「悲しい」「恥ずかしい」「後悔」とある。当時の A は、母親とかなり緊密な関係性であったことがうかがえる。ボーエンは、ある二者間に不安や緊張が起こった場合に、第三者を巻き込んだ三角関係のシステムを構成する。特に、二者のうち不満をよりつよく感じる者が、新たに巻き込んだ第三者と緊密な関係になる場合が多いとされていると論じている (Kerr & Bowen 1988=2001)。つまりこの時、A の両親は、父親のギャンブル依存問題が原因で、夫婦間に不安や緊張が起こっており、第三者として子である A を巻き込み、三角関係のシステムを構築した。さらに、不満をより強く感じている母が、A と緊密な関係になったと考えられる。

そして、そのような状況の中、母が遅くまで働くことになり、Aは寂しさを感じている。母とAが共に過ごす時間が短くなることで、母とAの緊密性には揺らぎが生じる。そこでAは、(無意識的に)三角関係の家族システムを維持するために〈母との緊密性を維持する〉という「me」を取得し、それに従順に従い、Aは「I」として〈母親の気を引くために問題行動を起こす〉という反作用をした。その結果、Aの家族には〈Aのことを心配し、母親が仕事を辞める〉という変化が起こった。そして、その結果〈母との緊密性を維持する〉という「me」は、それ自体が強化される形で、再構築された。

これを家族システムの観点からみると、この「I」としての行動は、母が仕事を辞めることで母とAと一緒に過ごす時間が増え、家族の態度に〈母とAの関係性をより緊密にする〉という変化をもたらした。すなわち前に述べた〈三角関係のシステムを強化した〉という結果をもたらしたと考えられる。ボーエンは「家族内において三角形化が強化されると、その結果として症状が固定化する場合があるため、家族の症状を改善するためには、脱三角形化をする必要がある。」と述べている。つまり、ここでのAにおける「I」としての行動は、家族内の三角関係システムの強化をもたらし、ギャンブル依存症問題を固定化させたという結果に終わったと考えられる。

#### (b) エピソード 35

エピソード35は、2014年8月14日に起こった出来事である。「2歳からもっているぬいぐるみを現在も大切にしている、不安なことがあると、小さい頃からそのぬいぐるみを抱きしめていれば安心することができた」というエピソードが記されている。当時のAにとって「愛しい」「安心」「不安」といった感情が現れるエピソードであり、現在のAにとって「恥ずかしい」エピソードである。

Aは、家庭内で依存症問題によるトラブルがあった際、家族の態度を取り入れ〈依存症問題によるトラブルで不安〉という「me」を構築すると、それに対して、「I」として〈ぬいぐるみを抱きしめる〉という反作用を行うことがルーティーンとなっていた。

しかし、この「I」は他者に対する反作用ではなく、モノに対する反作用である。よって、家族を変化させることはなかった。よって、ここでは、〈依存症問題によるトラブルで不安〉という「me」が再構築されることはなかったと考えられる。

#### (c) エピソード 49

エピソード49は、2013年から2018年にわたる出来事である。「Aが中学生の時、家族の中で父に対してのみ、抑えきれない怒りを感じ、暴言を吐いたり暴力を振るったりしていた。高校生になると少しマシにはなったがそうした反抗は続いていた。逆に母には一切反抗しなかった」というエピソードがかかっている。

当時のAにとって、「苦しい」「嫌悪」「怒り」「憎しみ」といった感情が現れるエピソードであり、現在のAにとって「苦しい」「悲しい」「恥ずかしい」「後悔」といった感情が現れるエピソードである。

このエピソードにおいて、三角関係の家族システムに巻き込まれているAは、(無意識的に)〈母とは仲良くし、父とは仲良くしない〉という「me」を構築している。それに対して従順に従い、「I」として〈父親に対して反抗的な態度をとる〉という反作用をしている。その結果、三角関係の家族システムを強化し、〈母とは仲良くし、父とは仲良くしない〉という「me」をさらに強化するという形で、「me」を再構築した。

よって、ここでの A における「I」としての行動についても、家族内の三角関係システムの強化をもたらし、ギャンブル依存症問題を固定化させたという結果に終わったと考えられる。

#### (d) エピソード 50

エピソード 50 は、2012 年から現在にわたるエピソードである。そこには、「中学生まで母と非常に仲良しだったが、大学入学をきっかけに 1 人暮らしを始め、A には新たな人間関係が出来た。しかし 1 人暮らしを始めてもなお、母の過干渉は続き、A はそれを鬱陶しく感じ、母からの電話や LINE を無視するようになった。だが、A が大学 2 年生くらい（母と父が仲良くなりだしたくらい）になると、だんだんと電話も減ったし心配されることも減った。時間がたつにつれて母の過干渉はなくなり段々と適度な距離感になり、嬉しく感じている。」というエピソードが記載されている。当時の A にとって、「不安」「恐怖」「嬉しい」という感情があり、現在の A にとって「恥ずかしい」「嬉しい」「苦しい」といったエピソードである。

このエピソードからも、当時の A は三角関係の家族システムに巻き込まれ、母と緊密な関係性になっていることがわかる。しかし、そうした家族の態度から構築された〈母と緊密な関係性を維持する〉という「me」に対して、A は「I」として〈実家を出て大学へ進学し 1 人暮らしする〉という反作用をした。そして、その結果、強制的に母と物理的な距離ができ、また新しい人間関係ができることで母との緊密性は弱まった。その結果、母は〈緊密な関係性を維持するために、A に対して LINE や電話を頻繁にする〉という行動をおこした。A はそこで、母の態度を取得し〈母との緊密な関係性を維持する〉という「me」を取得したが、それを拒否し「I」として〈母の電話や LINE を無視する〉という反応をとった。そして、この「I」として反応は、A の母に〈過干渉を辞める〉という変化をもたらし、A の〈母との緊密な関係性を維持する〉という「me」は、〈母との適度な距離感を保つ〉という「me」へと再構築された。

このように、「me」に対する「I」の反応は、「me」に従順に従うというだけでなく、拒否・闘うというかたちで反作用を伴うことがある。ミードはこれに対し「他人たちの態度を採用して自分の自我を適応させるか、それともそれと戦い抜くかという問題である。」と述べている (Mead 1934=1974)。この時の A が起こした一連の「I」としての行為は、従順に従うという反作用ではなく、この拒否・戦うという反作用である。

家族システムの観点からいうと、A は大学進学をきっかけに、固定化されていた家族システムの三角関係を不安定にさせ、最終的に三角関係のシステムから離脱した。ボーエンによると三者関係から 1 人が離脱することで、残りの二者関係は安定化する場合もあり、逆に不安定化する場合もある (Kerr & Bowen 1988=2001)。ログには、A の両親が仲良くなりだした時期と、母の過干渉が無くなった時期が同時期であると記されている。よって A が三角関係から離脱することにより、残りの二者関係、つまり A の両親の関係は安定化したと考えられる。また、ボーエンは、家族の症状を改善するためには、脱三角形化をする必要があると述べている。よって A の三角関係からの離脱は、家族における三角関係のシステムの脱三角形化を促し、家族の症状を改善したといえる。

よって、この出来事での「I」としての反作用は、A の家族の三角関係の家族システムを、脱三角形化へと促し、家族の症状を改善した。つまり、A の「I」としての反作用が、A の



家族システムを変え家族の症状を改善し、A を克服の第三のフェーズへと向かわせたといえる。

#### (e) エピソード 51

エピソード 51 は、2019 年のエピソードである。そこには「父の依存症問題による様々なエピソードを初めて家族以外の人、恋人に話した。今まで知られたいくない気持ちが強く誰にも話せなかったが、聞いてもらってすごく安心した。」とかかれている。当時の A にとって「苦しい」「悲しい」「安心」という感情が現れるエピソードであり、現在の A には「安心」「嬉しい」「恥ずかしい」といったエピソードである。当時の A にとって、人にトラウマ体験を話す行為は「苦しい」ものであり、悲しい感情を思い出させるものであったが、同時にその体験をした自分を他人に認めてもらうことで、A に「安心」や「嬉しい」という感情を与えたのだろう。

ここで少々気になる点がある。なぜ A はこの時まで、誰にも話せなかったのだろうか。2006 年に父のギャンブル依存症が発覚しているのに、約 13 年間誰にも話せなかったということになる。A が依存症問題に「I」として自発的な行動を見せ始めたのは、コレスポネンダンス分析より 2012 年頃であることが分かっている。それにも関わらず、人に話せたのは 2019 年になってからなのである。その理由については、エピソード番号 52 に以下のように記載されていた。

私はギャンブル依存について誰にも相談できなかったから、誰かが正しい知識を吹き込んでくれることもなかった。相談できなかったのは、家族の中で「このことは言うてはいけない」という暗黙の了解があったからだ。父親がギャンブル依存なんてすごく恥ずかしいことという認識があった。私が住んでいたところは田舎で、1 人に言うと地域全体に広まる恐れがあった。だから余計に誰にも言えなかった。私が誰かに相談してしまうと、家族に迷惑がかかる。知られてしまうと、変な目で見られてこの地域に住みづらくなるかもしれない。父も仕事に行きづらくなるかもしれない。人に相談するにはリスクがありすぎた。すごく閉鎖的だったと思う。

A の実家は、田舎にあり、誰かに言うと地域全体に知られてしまい、家族が住みづらくなる可能性があるような環境であった。そのため、家族内で「誰にも言うてはいけない」という暗黙の了解が出来上がっており、誰にも言うことが出来なかったというのである。つまり A は、実家で暮らしているときは、家族の暗黙の了解に従い〈家族に迷惑がかかるから誰にも言うてはいけない〉という「me」を取得し、それに対して「I」は〈誰にも言わない〉という従順な反作用をしていた。しかし、田舎である実家を離れ、京都という都市で生活を始めたことをきっかけに、〈家族に迷惑がかかるから誰にも言うてはいけない〉という「me」に対して、「I」として〈恋人にはカミングアウトする〉という反作用をした（ここでの「I」としての反作用も拒否・戦うという反作用である）。すると家族に迷惑がかかることはなく A は安心を手に入れることが出来た。そして、A の中で家族の暗黙の了解、つまり家族の態度が変更された。そしてその結果として〈家族に迷惑がかかるから誰にも言うてはいけない〉という「me」は、〈家族とかかわりのない人にならカミングアウトしてもよい〉という「me」へと再構築された。

そして、Aの「父のギャンブル依存症によって苦しんだ」自己物語は、「語り得ないもの」から「語り得るもの」になった。浅野によると、トラウマ的体験が語り得ないものになるのは、語り手と語られる体験との間に十分な距離が確保できないからである。体験と語り手の距離が近すぎて端的にショートしてしまい、当事者の視点から距離を置いた語り手の視点を確保できないのであるとされている（浅野 2001）。つまり、「語り得ないもの」から「語り得るもの」になったということは、「父のギャンブル依存症によって苦しんだ」自己物語の中にいる自分と現在のAとの間に距離をおいて、それを過去の出来事として捉えられるようになったということである。すなわち、父のギャンブル依存症に囚われていた状態だったAは、自己物語を語ることによって語り手の視点を確保することができた結果、過去に囚われていた状態から抜け出し、新たな自立したAとして生まれ変わったことができる。

## (2) 家庭からの自立による「I」の自由化——社会分化論——

以上のように、エピソード50とエピソード51におけるAの「I」としての行動が、克服の第3のフェーズへの移行を可能にした。このエピソード50, 51における「I」としての行動は、いずれもAが田舎であった実家を離れ、京都という都市で1人暮らしを始めたことがきっかけで起こされた行動である。実家にいた時のエピソードである32.49における「I」としての行動は、いずれも〈母との緊密な関係性を維持する〉という「me」に従順に従った結果であり、三角関係の家族システムを強化するものであった。つまり、この時の「I」は完全に「me」に囚われている状態であった。しかし、田舎から京都へ移り住んだ後のエピソード50, 51では、家族の態度を採用した「me」に囚われることはなくなり、「me」に対して、拒否や反抗といった反作用もするようになっていく。すなわち、より自由な「I」としての反作用をするようになっていく。

では、Aはなぜ、田舎にある実家から、京都へ移り住んだことによって、より自由な「I」としての反作用が可能になったのだろうか。これに対する回答については、ジンメルの「社会分化論」にみることができる。2章で示したように、ジンメルによると、公的な精神は個人が多層な複数の社会圏に属し、その中で相互的作用が行われることで生まれ、そうして人は自立した状態になるという（Simmel 1890=1973）。すなわち、Aは田舎にある実家から京都へ移り住んだことによって、多層な複数の社会圏に属するようになり、公的な精神が発達し、家庭からの自立を達成した。その結果、Aは、家庭に囚われないより自由な「I」としての反作用が可能になったと仮定することが出来る。実際に、Aの小学生から大学生における社会圏の変化を、Aの証言に基づいて作成した図からみていく。

図3から図6をみると、大学生になり、社会圏が拡大していることが明らかである。まず、図3から図5においては、田舎という地域の特質上、ネットゲームやSNS以外、全ての社会圏は直接的に家庭と関わりを持っている。よってAはどの社会圏に属していても、全てが家庭と繋がっており、家庭に囚われている共依存状態となっていることが分かる。この状態では、家庭からの自立は非常に困難なものとなる。ジンメルのいう、自立を達成する社会圏の条件とは程遠い状態である。

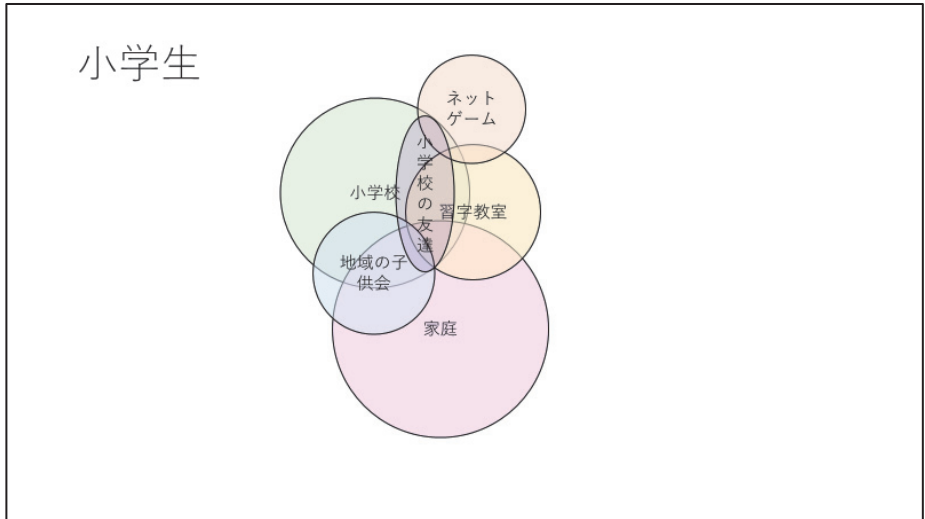


図 3 小学生時代における社会圏

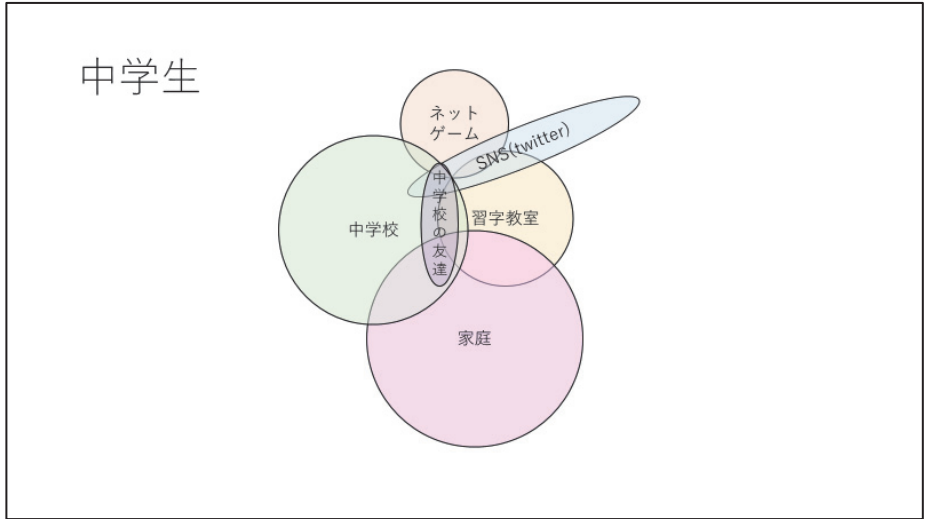


図 4 中学生時代における社会圏

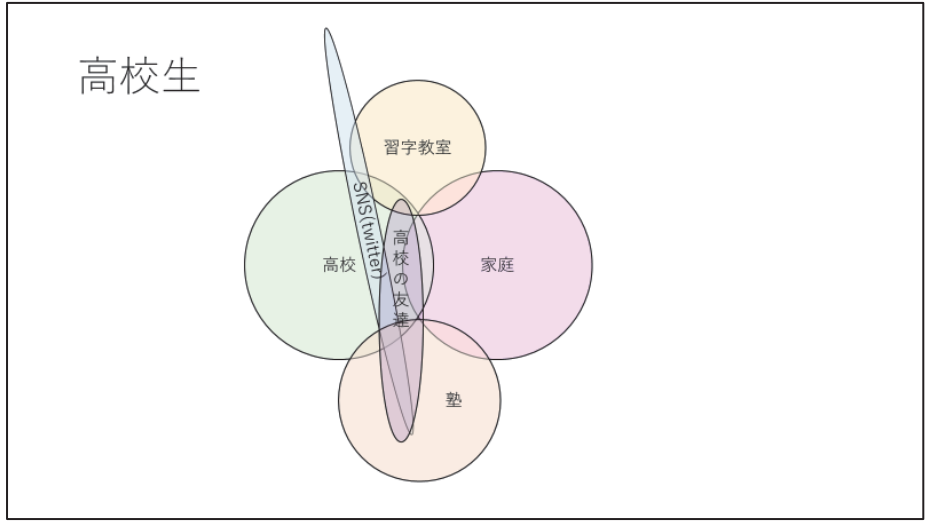


図 5 高校生時代における社会圏

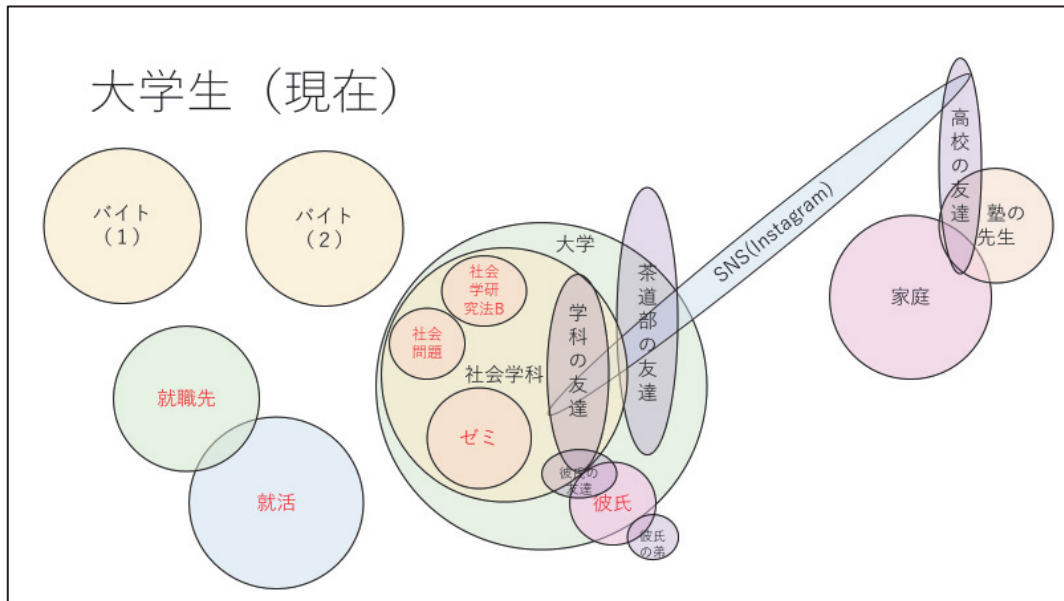


図6 大学生時代における社会圏

しかし、図6に示すように、Aが実家を出て京都という都市に移住することによって、その社会圏は明らかに拡大した。家庭とは繋がっていない文化圏が多数存在している。その数15個である。よって、Aは家庭とは繋がりのない社会圏に複数所属することにより、公的な精神を発達させ、家庭からの自立を達成したといえる。さらに、赤文字で記している社会圏については、Aが「父親のギャンブル依存」のことをカミングアウトできた場所である。高校生まで、誰にも言えなかったにも関わらず、実家をでることにより、6個もの社会圏でAはカミングアウトすることができたのである。

以上より、Aは、田舎にある実家を出て、京都という都市で、新たに家庭とは重ならない複数の社会圏に分属することが可能となり、家庭からの自立を達成した。京都に移り住む前は、家族と共依存状態にあり、Aの「I」としての行動は、家族の態度を採用する「me」に囚われていた。しかし、家庭から自立することにより、家庭の態度を採用する「me」に対して、より自由な「I」としての反作用が可能となり、「me」を再構築することが出来た。その結果、Aは克服の第三のフェーズへと向かっていったと結論づけられる。

#### 4.4 第三のフェーズ（2020年～2021年）

そして、第1象限に位置する当時の感情は、「楽しい」「幸せ」であり、ログ時の感情は「幸せ」「楽しい」「嬉しい」である。第2象限や第3象限とは大きく異なり、負の感情ではなく、正の感情が位置している。よって、このフェーズは、Aが家族の依存症問題から克服したことを表す。第一のフェーズで、家族の態度を採用している「me」の状態から、第二のフェーズでは、文化圏が大きく拡大することで獲得した、より自由な「I」として反作用を行った結果、家族の集団的態度を変え、最終的にAの「me」は再構築され、この克服の第三のフェーズへと移行したと考えられる。

## 5 結論

最後に、本稿で明らかになったことについてまとめ、本研究の今後の課題について述べる。本稿では、これまで述べてきた通り、ギャンブル依存症の父を持つ家庭で育った大学生 A はどのようにして家族の依存症問題から立ち直ったのかという点について、ミードの社会的自我論、浅野の自己物語論、ジンメル为社会分化論、ボーエンの家族システム論をもとに研究をすすめてきた。そして、克服に至るまでの過程を第一のフェーズ、第二のフェーズ、第三のフェーズにわけて、それぞれの自己の変化について分析を行った。その結果、以下のことが分かった。

まず、第一のフェーズにおいて、A はギャンブル依存症問題により様々な症状を抱える家族の態度をそのまま取り入れ、「me」を構築した。しかし、それに対する「I」としての動きはほとんどみられず、このフェーズにおける A は依存症問題に巻き込まれ身動きがとれない状態であったといえる。一方、第二のフェーズでは、家族の態度をそのまま取り入れて構築した「me」に対して、A は「I」として様々な反作用を起こしている。「I」としてのエピソードは、とりわけ現在の A が語り得ないものにしてきた 5 つの「恥ずかしい」エピソードに現れた。しかしそのうちの 2 つ、A が田舎にある実家で暮らしていた際のエピソードにある「I」としての反作用は、〈母との緊密な関係性を維持する〉という「me」に従順に従ったものであり、結果的に依存症家族の症状である三角関係の家族システムを強化することとなった。この時の「I」は「me」に囚われ、自由を奪われていたのだ。

しかし、大学入学をきっかけに A が田舎にある実家を出てからの 2 つのエピソードにおける「I」としての反作用は、「me」に対しての拒否・反抗を示すものとなった。つまり「I」が「me」に囚われることがなくなり、より自由な「I」となったのだ。「I」を「me」から解放し自由を与えた要因は、ジンメル社会分化論より、A が田舎から都市へと移り住み、大学へ通ったことによって文化圏が広がり、公的な精神が発達した結果、家庭からの自立が達成されたためであると考えられる。そして、家庭からの自立により、「me」に囚われることがなくなった「I」としての反作用は、家族の態度に変化を与え三角関係の家族システムの脱三角化を促した。結果として、家族の態度から構築されていた「me」も再構築され、A は克服の第三のフェーズへと向かっていった。

今後の課題としては、本稿では 1 人の人物について取り上げたのみであり、この結論が多くの人に当てはまるものであると証明することが出来ていない。今後は、この結論が一般的に当てはまると証明することが課題としてあげられる。また、大学生 A について克服したと結論付けたが、克服のフェーズに留まっている期間は約 2 年であり、今後もこの状態が維持されるのかという点について検討できていない。さらに、依存症問題は家族の病といわれているにもかかわらず、本稿では A の立場からしか検討できておらず、母親や父親の変化についても考慮し検討する必要がある。

最後に、本論文執筆にあたり調査にご協力いただいた大学生 A さん、多くのご指導と助言をくださった立木茂雄先生に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

[文献]

- 浅野智彦, 2001, 『自己への物語論的接近—家族療法から社会学へ』 勁草書房.
- Kerr, M.E. & Bowen, M., 1988, *Family evaluation: an approach based on Bowen theory*, New York: W.W. Norton & Company. (藤縄昭・福山和女訳, 2001, 『家族評価 ボーエンによる家族探究の旅』 金剛出版.)
- 厚生労働省, 2021, 「ギャンブル依存症の理解と相談支援の視点」, 厚生労働省ホームページ, (2021年10月15日取得, <https://www.mhlw.go.jp/content/12000000/000633402.pdf>).
- Mead, G.H., 1934, *Mind, self, and society: from the standpoint of a social behaviorist*, The University of Chicago Press. (稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳, 1974, 『精神・自我・社会—社会的行動主義者の立場から』 青木書店.)
- 西川京子, 2014, 『知っていますか? ギャンブル依存症一問一答』 解放出版社.
- , 2018, 『依存症家族を支える Q&A—アルコール・薬物・ギャンブル依存症家族のメッセージを添えて』 解放出版社.
- 精神福祉保健資料, 2018, (2021年10月15日取得, <https://www.ncnp.go.jp/nimh/seisaku/data/>).
- Simmel, G., 1890, *Über sociale Differenzierung: soziologische und psychologische Untersuchungen*, Duncker&Humblot. (居安正訳, 1973, 『現代社会学体系 第1巻 社会分化論 社会学』 青木書店.)
- 総務省, 2021, 「ギャンブル等依存症対策基本法第二条」, e-Gov 法令検索, (2021年10月15日取得, [https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=430AC1000000074\\_20210901\\_503AC0000000036&keyword=%E3%82%AE%E3%83%A3%E3%83%B3%E3%83%96%E3%83%AB](https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=430AC1000000074_20210901_503AC0000000036&keyword=%E3%82%AE%E3%83%A3%E3%83%B3%E3%83%96%E3%83%AB)).